

目次

【2017年 聖書講筵レジュメ（配付資料等）】

2017年

2017年4月「無くてならぬもの」

2017年4月16日（KKR京都くに荘）

2017年4月 復活節集会並びに講演会の報告

2017年4月19日（京都）

2017年5月 福音特別セミナーの課題

2017年5月13～14日（御殿場東山荘）

2017年7月 京都キリスト召団 夏季福音特別集会のご案内

2017年7月9日（京都）



2017年4月 「無くてならぬもの」

2017年4月16日 (KKR京都くに荘)

新約聖書ルカによる福音書10章38節～42節

「³⁸一同が旅を続けているうちに、イエスがある村へはいられた。するとマルタという名の女がイエスを家に迎え入れた。³⁹この女にマリヤという妹がいたが、主の足もとにすわって、御言に聞き入っていた。⁴⁰ところが、マルタは接待のことで忙しくて心をとみだし、イエスのところにきて言った、「主よ、妹がわたしだけに接待をさせているのを、なんとも思いになりませんか。わたしの手伝いをするように妹におっしゃってください」。⁴¹主は答えて言われた、「マルタよ、あなたは多くのことに心を配って思いわずらっている。⁴²しかし、無くてならぬものは多くはない。いや、一つだけである。マリヤはその良い方を選んだのだ。そしてそれは、彼女から取り去ってはならないものである」。(ルカ10・38～42)

ここに引用したエピソードは私たちに多くのことを考えさせる。

マルタは働きものである。私たちの社会では、勤勉が美德とされ、怠け者は非難される。勤勉は美德ではあるが、余りにもそれにのめり込み過ぎると、「過労死」を招いたり、「エコノミック・アニマル」と呼ばれたりという不評を買うことになる。

私個人の経験から言うと、同時に多種多様な仕事が覆いかぶさってくると、どれから手を付けてよいのか、期限までに間に合わせられるのか、満足のいくような内容の仕事ができるのかなど、それこそ、「思い煩い」の塊のようになることが、しばしばであった。そんなとき、マルタに言われたイエスのこの言葉が思い煩いから解き放ってくれる「魔法の妙薬」のように、私の思いを主イエス・キリストへと向けさせてくれた。

「そうだ、自分ひとりではやるのではない。私は主キリストの弟子だ。主が共に働いてくださる。人の目にどう映ろうと、お前はお前のベストを尽くせばそれで良いのだ。主が責任をとって下さる！」

と自らに言い聞かせて、心穏やかに切り抜けた事が幾度あったことか！

誤解して欲しくないことは、マリヤのように、いつも主イエスの傍に座りこんで御言葉に聞き入っていることだけが称賛されているわけではない、ということ。引用の場面は、姉妹たちが主イエスにお目にかかれる最後の機会だった。そのとき、マリヤは主イエスの御口から出る御言葉を一言も聞きもらすまいと全身を傾注していた。マルタはおもてなし



に全力投球したかった。それぞれに最もふさわしい在り方で最後の別れの時を過ごしたかったのだ。だから、それに徹しておればよかった。どちらが優れているとか、劣っているとかい比較の問題ではないのだ。ところが、マルタの心が乱れた。そして、マリヤの態度を見て心穏やかではなかった。マリヤが主イエスを独占しているように映った。その不満が、あのイエスへの問いかけ

「主よ、妹がわたしだけに接待をさせているのを、なんともお思ひになりませんか」

という言葉となって表れた。

私たちの日常生活の場でもよくあることだ。自分ばかりが下働きをさせられているとか、誰それさんは、いい役ばかりを引き受けていて不公平だとか、自分の苦勞を周囲も上司もわかってくれない、とか。

大切なことは、主キリストがどう思っているかということ。クリスチャンは、主の御心に適う生き方をする事、主が自分に何を求め、何を願っておられるか、主の御意を第一とする生き方、働き方、これに徹して行くことではないだろうか。

マタイによる福音書4章1〜4節

「¹さて、イエスは御霊によって荒野に導かれた。悪魔に試みられるためである。

²そして、四十日四十夜、断食をし、そのうち空腹になられた。³すると試みる者がきて言った、「もしあなたが神の子であるなら、これらの石がパンになるように命じてごらんさい」。⁴イエスは答えて言われた、『人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言ことばで生きるものである』と書いてある」。

『人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言で生きるものである』とは、旧約聖書申命記の8章3節に由来する。8章2節以下を引用しよう。

「²あなたの神、主がこの四十年の間、荒野であなたを導かれたそのすべての道を覚えなければならぬ。それはあなたがあなたを苦しめて、あなたを試み、あなたの心のうちを知り、あなたがその命令を守るか、どうかを知るためであった。³それで主はあなたを苦しめ、あなたを飢えさせ、あなたも知らず、あなたの先祖たちも知らなかったマナをもつて、あなたを養われた。人はパンだけでは生きず、人は主の口から出るすべてのことばによって生きることであなたに知らせるためであった。」(申命記8:2〜3)

『神の口から出る一つ一つの言で生きるものである』とはどういうことか？ 私たちの肉体の命はそれを支え、養ってくれる食物で生かされている。食物だけではない。清らかな空気や水、太陽の恵みなどの良好な自然環境の中で生かされている。しかし、人は「肉体の命」のほかに、「霊の命」を備えた存在である。この霊の命を養うもの、「霊の食物」は何だろうか？



それが、上記の「神の口から出る一つ一つの言」なのである。ただし、「神の口から出る一つ一つの言」といっても、それは、物のように存在しているものではなく、神御自身の分身とでも言うべきもの、従ってそれには「神の霊」「神の命」が宿っており、それを受けとった人間に「霊の命」(ヨハネ伝福音書で「永遠の生命」と表現されている事態)を与えるものである。ヨハネ伝福音書6章において、イエスは繰り返し、

「わたしは命のパンである。」

と語っておられる。ここに言われている「命」は、肉体の命ではなく、「霊の命」である。そして、最も著しい言葉は、

「人を生かすものは霊であって、肉はなんの役にも立たない。わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、また命である。」(ヨハネ6・63)

との宣言である。

旧約聖書の「アモス書」に次のような箇所がある。

「主なる神は言われる、「見よ、わたしがききんをこの国に送る日が来る、それはパンのききんではない、水にかわくでもない、主の言葉を聞くことのききんである。¹²彼らは海から海へさまよい歩き、主の言葉を求めて、こなたかなたへとはせまわる、しかしこれを得ないであろう。¹³その日には美しいおとめも、若い男もかわきのために氣を失う。」(アモス8・11～13)

このように、人の「霊の命」は「神の口から出る一つ一つの言」によって養われ、生きることができるとしても、はたして、人は素直にこの「神の口から出る一つ一つの言」を受けとったであろうか。人間の「自我」がこれを妨げているのではなからうか。

旧約聖書の中の「エレミヤ書」に次のように記されている。

「²³主はこう言われる、「知恵ある人はその知恵を誇ってはならない。力ある人はその力を誇ってはならない。富める者はその富を誇ってはならない。²⁴誇る者はこれを誇とせよ。^{ほこり}すなわち、さとくあつて、わたしを知っていること、わたしが主であつて、地に、いつくしみと公平と正義を行っている者であることを知ることがそれである。わたしはこれらの事を喜ぶと、主は言われる。」(エレミヤ9・23～24)

「⁵主はこう言われる、「おおよそ人を頼みとし肉なる者を自分の腕とし、その心が主を離れている人は、のろわれる。⁶彼は荒野に育つ小さい木のように、何も良いことの来るのを見ない。荒野の、干上がった所に住み、人の住まない塩地にいる。⁷おおよそ主にたより、主を頼みとする人はさいわいである。⁸彼は水のほとりに植えた木のように、その根を川にのばし、暑さにあつても恐れることはない。その葉は常に青く、ひでりの年にも憂えることなく、絶えず実を結ぶ。」

9 心はよろずの物よりも偽るもので、はなはだしく悪に染まっている。だがこれがこれを、よく知ることができようか。10 「主であるわたしは心を探り、思いを試みる。おのおのに、その道にしたがい、その行いの実によって報いをするためである。」(エレミヤ17・5〜10)

エレミヤ書31章には次のように記されている。

「31主は言われる、見よ、わたしがイスラエルの家とユダの家とに新しい契約を立てる日が来る。32この契約はわたしが彼らの先祖をその手をとってエジプトの地から導き出した日に立てたようなものではない。わたしは彼らの夫であったのだが、彼らは私の契約を破ったと主は言われる。33しかし、それらの日の後にわたしがイスラエルの家に立てる契約はこれである。すなわちわたしは、わたしの律法を彼らのうちに置き、その心にする。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となると主は言われる。34人はもはや、おのおのその隣とその兄弟に教えて、『あなたは主を知りなさい』とは言わない。それは、彼らが小より大に至るまで皆、わたしを知るようになるからであると主は言われる。わたしは彼らの不義をゆるし、もはやその罪を思わない。」(エレミヤ31・31〜34)

このエレミヤ書の預言が成就するには、人間の「そむき」「自我」という妨げが取り除かれなければならない。「肉」とは「自我」「自己中心の在り方」であり、「霊」とは「神を第一とする」「神の御意のみを立てる在り方」である。「肉」なる存在でしかない生まれながらの我々人間には、「霊なる神」は宿り得ない。霊なる神の賜う「霊の命」(永遠の生命)は宿ることができない。あたかも、水と油のように、異質であって排斥しあってしまう。

主キリストは言われた。

「神は霊なれば、拝する者も霊と真^{まこと}とをもて拝すべきなり」(ヨハネ4・24)

と。また、ニコデモとの対話の中で、

「3人あらたに生れずば、神の国を見ること能わず。……5人は水と霊とによりて生れずば、神の国に入ること能わず、6肉によりて生るる者は肉なり、

霊によりて生るる者は霊なり。」(ヨハネ3・3〜6)

と宣言しておられる。

生まれながらの人間を「肉」と呼ぶならば、この「肉なる人」はそのままでは「神の国」を見ることも、入ることもできない。肉体の終り(死)の後に、霊魂はどこに行くのだろうか。見える世界、物質界がすべてだと信じる人は聖書が開示している世界(神の次元、霊の次元)を知ることができない。その人にとっては、イエスは十字架で死んで、葬られて、そのまま朽ち果てたままであろう。輝かしい霊体(肉体とは全く異なる存在形態)となって現れたことなど、到底、受け入れがたいであろう。そして、自己自身もまた、死んで焼かれて灰となつ



て、まさに「死滅」するだけであろう。

けれども、聖書が開示する世界は、まさに、この「現象界」の奥の世界、「根源界」の事態なのである。根源界（神の次元）のことは、私たち現象界に生れ、生きている存在には、本来、分からない、分かるはずもない事態である。根源界に居られ、そこからお出でになった方が、それについて語ることができる。イエスは、ご自分を、そのような存在として自覚しておられた。イエスが、常に、「父よ」と神（父神・霊神）に祈りかけ、その御意のみを求めて生きられたのは、ごく自然のことだったに違いない。

そして、我々も、「新たに生れ」るならば、「上（天）より生れ」るならば、イエスと同じように、「霊なる人」として、神の言葉を食べ、神の命と同質の命（その内実は、愛であり、永遠の生命である）に生きるはずである。ところが、古来、誰一人として、当然のように、そのような真の命、永遠の生命に生きた人はいなかった。

悲しいかな、我々は、存在そのものが神に逆らっている。神（神の御意）よりも、自己（我意）を立てようとする。自分を助け、護り、あわよくば、富を増し加えてくれる神ならば信じてよい、いや、信じたい、しかし、そうでない神は不要だ、というのが、自己中心的な人間の本音であろう。つまり、神は人間の幸福に仕える僕であって、人間が「神の僕」なのではない。この在り方が「罪」と聖書が呼ぶものである。

ところが、イエスという方は全く正反対であった。イエスにとつては神が第一であつて、自己を神にささげ切っておられた。その生き方、在り方が「義」であつて、イエスは正に「義人」であつた。のみならず、父なる神の御意に従つて我々人間の「罪」「不義」を負い、引き受け、十字架に架かつて「贖罪」の大業を果たされたのである。

パウロは「ローマ人への手紙（ロマ書）」において、「肉」（自己中心の生き方、在り方）と「霊」（神を第一とする、神中心の生き方、在り方）の対比を次のように述べている。

「³律法（神の聖なる御意）が肉により無力になっているためになし得なかったことを、神はなし遂げて下さった。すなわち、御子を、罪の肉の様で罪のためにつかわし、肉において罪を罰せられたのである。⁴これは律法の要求が、肉によらず霊によって歩くわたしたちにおいて、満たされるためである。⁵なぜなら、肉に従う者は肉のことを思い、霊に従う者は霊のことを思うからである。⁶肉の思いは死であるが、霊の思いは、いのちと平安とである。⁷なぜなら、肉の思いは神に敵するからである。すなわち、それは神の律法に従わず、否、従い得ないのである。⁸また、肉にある者は、神を喜ばせることができない。⁹しかし、神の御霊があなたがたの内に宿っているなら、あなたがたは肉におけるのではなく、霊におけるのである。もし、キリストの霊を持たない人がいるなら、その人はキリストのものではない。¹⁰もし、キリストがあなたがたの内におられるなら、からだは罪のゆえに死んでいても、



霊は義のゆえに生きているのである。(中略)

¹⁴すべて神の御霊に導かれている者は、すなわち、神の子である。¹⁵あなたがたは再び恐れをいだかせる奴隷の霊を受けたのではなく、子たる身分を授ける霊を受けたのである。(ロマ8:3-15)

このような「霊」(神中心)の生き方をするには、その前提として、「肉」(自己中心)の生き方、それを当然のこととしている生来の「我」(肉)からの解放、脱却がなされなければならない。それを成して下さったのが主キリストの「十字架」であった。十字架において「我」(旧き我、肉)を葬り、清き神の霊(聖霊)を賜り、この聖霊の導きによって初めて私たちは、御心(御意)に合う生き方ができるようになるのである。

パウロは、「ガラテヤ人への手紙」(ガラテヤ書)において次のように告白している。

「¹⁹わたしは、神に生きるために、律法によって律法に死んだ。わたしはキリストと共に十字架につけられた。²⁰生きているのは、もはや、わたしではない。キリストが、わたしのうちに生きておられるのである。しかし、わたしがいま肉にあつて生きているのは、わたしを愛し、わたしのために御自身をささげられた神の御子を信じる信仰によって、生きているのである。」(ガラテヤ2:19-20)

と。ここで、「律法」について少し触れるならば、起源はモーセの「十戒」に遡るものであり、神が「選びの民」であるイスラエル民族に対し、神との関係における民(人間)の在り方を示したもので、それを遵守することで神に祝福され、幸いを得ることができるという「恵みの言葉」であった。「出エジプト記」20章から引用しよう。

「¹神はこのすべての言葉を語って言われた。²「わたしはあなたの神、主であつて、あなたをエジプトの地、奴隷の家から導き出した者である。³あなたはわたしのほかにも、なにもものをも神としてはならない。⁴あなたは自分のために、刻んだ像を造ってはならない。上は天にあるもの、下は地にあるもの、また地の下の水のなかにあるものの、どんな形をも造ってはならない。⁵それにひれ伏してはならない。それに仕えてはならない。あなたの神、主であるわたしは、ねたむ神であるから、わたしを憎むものには、父の罪を子に報いて、三、四代に及ぼし、⁶わたしを愛し、わたしの戒めを守るものには、恵みを施して、千代に至るであらう。」

⁷あなたは、あなたの神、主の名をみだりに唱えてはならない。主は、み名をみだりに唱えるものを、罰しないでは置かないであらう。

⁸安息日を覚えて、これを聖とせよ。⁹六日のあいだ働いてあなたのすべてのわざをせよ。¹⁰七日目はあなたの神、主の安息であるから、なんのわざもしてはならない。あなたもあなたのむすこ、娘、しもべ、はしため、家畜



またあなたの門のうちにいる他国の人もそうである。¹¹主は六日のうちに、天と地と海と、その中のすべてのものを造って、七日目に休まれたからである。それで主は安息日を祝福して聖とされた。

¹²あなたの父と母を敬え。これは、あなたの神、主が賜わる地で、あなたが長く生きるためである。

¹³あなたは殺してはならない。

¹⁴あなたは姦淫してはならない。

¹⁵あなたは盗んではならない。

¹⁶あなたは隣人について、偽証してはならない。

¹⁷あなたは隣人の家をむさぼってはならない。隣人の妻、しもべ、はしため、牛、ろば、またすべて隣人のものをむさぼってはならない。」(出エジプト 20・1～17)

律法は「聖なるもの」であり、本来、それを遵守することによって神に祝福され、幸いを得、「命に至る」はずのものであった。その前提として、人間が神に信頼し、全托し、その心が、内面が、神と同質のものであつて初めて全うすることができるものであった。

とりわけ、「神」以外のものに仕えない、どんな状況においても、「神」以外のものに心を奪われないということは、人間にとつては至難の業である。イエスは、「神と富とに兼ね仕えることはできない」と言われたが、富(財産)や地位や名誉・名声などを得るためには「神」を捨てることを辞さないのが普通の人間(パウロの言う「肉」なる人間)の悲しき「性」^{さが}である。また、涙ぐましい努力精進によつて「律法」を全うしたとしても、その人は、それを誇りとし、律法を守れない他人を裁くという傲慢さを免れないのが一般である。イエスが「偽善なる学者(律法学者)・パリサイ人」と厳しく批判されたのは、このような人たちのことである。使徒パウロの過去はこのような姿であつた。彼はローマ書の中で次のように告白している。

「⁹わたしはかつては、律法なしに生きていたが、戒めが来るに及んで、罪は生き返り、¹⁰わたしは死んだ。そして、いのちに導くべき戒めそのものが、かえつてわたしを死に導いて行くことがわかった。¹¹なぜなら、罪は戒めによつて機会を捕え、わたしを欺き、戒めによつてわたしを殺したからである。¹²このようなわけで、律法そのものは聖なるものであり、戒めも聖であつて、正しく、かつ善なるものである。¹³では、善なるものが、わたしにとつて死となつたのか。断じてそうではない。それはむしろ、罪の罪たることが現れるための、罪のしわざである。すなわち、罪は、戒めによつて、はなはだしく悪性なものとなるために、善なるものによつてわたしを死に至らせたのである。」(ロマ7:9～13)

ガラテヤ書においては、さらに次のように論している。



「自由を得させるために、キリストはわたしたちを解放して下さったのである。だから、堅く立って、二度と奴隷のくびき（律法）につながれてはならない。」（ガラテヤ5:1）

「¹³兄弟たちよ。あなたがたが召されたのは、実に、自由を得るためである。ただ、その自由を、肉の働く機会としないで、愛をもって互に仕えなさい。¹⁴律法の全体は、『自分を愛するように、あなたの隣り人を愛せよ』というこの一句に尽きるからである。」（ガラテヤ5:13-14）

と。そして、キリストの賜う聖霊（御霊）の結ぶ実を次のように記す。

「²²御霊の実は、愛、喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実、²³柔和、自制であつて、これらを否定する律法はない。²⁴キリスト・イエスに属する者は、自分の肉を、その情と欲と共に十字架につけてしまったのである。

²⁵もしわたしたちが御霊によつて生きるのなら、また御霊によつて進むうではないか。²⁶互に挑み合い、互にねたみ合つて、虚栄に生きてはならない。」（ガラテヤ5:22-26）

と。「無くてならぬもの」という主題のもとで、「神と人」との関係で、及び「人と人」との関係で、最も大切なことを「聖書」に求めるならば、次のイエスの言葉に目を止めたい。

「²⁸ひとりの律法学者がイエスに、「すべてのいましめの中で、どれが第一のものですか。」と質問したのに対して、²⁹イエスは、次のように答えられた。「第一のいましめはこれである、『イスラエルよ、聞け。主なるわたしたちの神は、ただひとりの主である。³⁰心をつくし、精神をつくし、思いをつくし、力をつくして、主なるあなたの神を愛せよ』。³¹第二はこれである、『自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ』。これより大事ないましめは、ほかにない」。（マルコ12:29-31）

また、旧約聖書の「ミカ書」に次のような記述がある。

「⁶わたしは何をもつて主のみまえに行き、高き神を拝すべきか。燔祭^{はんさい}および当歳の子牛をもつてそのみ前に行くべきか。⁷主は数千の雄羊、万流の油を喜ばれるだろうか。わがとがのためにわが長子をささぐべきか。わが魂の罪のためにわが身の子をささぐべきか」。⁸人よ、彼はさきによいことのなんであるかをあなたに告げられた。主のあなたに求められることは、ただ公義をおこない、いつくしみを愛し、へりくだつてあなたの神と共に歩むことではないか。」（ミカ6:6-8）

「ただ公義をおこない、いつくしみを愛し、へりくだつて神と共に歩む」こと。イエスが歩まれた道、示された生き方、在り方は、まさにそれであつた。これが「義人」の姿（相）である。神の求められる生き方、在り方であつた。



以上、人の側からの「神への愛」「人への愛」を述べたが、実は、そのような「愛」の源泉は「神」御自身なのである。イエスは、神を、そのような「愛」なる方として顕した。イエスは、神の現象体、

「わたしを見たものは神を見たのである」

と語られ、

「父とわたしとは一つである」

と言っておられる。ヨハネによる福音書(ヨハネ伝)は、そのような「神の愛」を表している。

「¹⁶神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。¹⁷神が御子を世につかわされたのは、世をさばくためではなく、御子によって、この世が救われるためである。」(ヨハネ3・16～17)

パウロは、『ローマ書』の中で、

「⁶わたしたちがまだ弱かったころ、キリストは、時いたって、不信心な者たちのために死んで下さったのである。⁷正しい人のために死ぬ者は、ほとんどいないであろう。善人のためには、進んで死ぬ者もあるいはいるであろう。⁸しかし、まだ罪人であった時、わたしたちのためにキリストが死んで下さったことによって、神はわたしたちに対する愛を示されたのである。」(ロマ5・6～8)

と述べている。このような「神の愛」を『ヨハネの第一の手紙』は次のように高らかに謳っている。

「¹わたしたちが神の子と呼ばれるためには、どんなに大きな愛を父から賜わったことか、よく考えてみなさい。わたしたちは、すでに神の子なのである。世がわたしたちを知らないのは、父を知らなかったからである。²愛する者たちよ。わたしたちは今や神の子である。しかし、わたしたちがどうなるのか、まだ明らかではない。彼が現れる時、わたしたちは、自分たちが彼に似るものとなることを知っている。そのまことの御姿を見るからである。³彼についてこの望みをいだいている者は皆、彼がきよくあられるように、自らをきよくする。」(ヨハネ1・3・1～3)

「⁷愛する者たちよ。わたしたちは互に愛し合おうではないか。愛は、神から出たものである。すべて愛する者は、神から生れた者であって、神を知っている。⁸愛さない者は、神を知らない。神は愛である。⁹神はそのひとり子を世につかわし、彼によってわたしたちを生きるようにして下さった。それによって、わたしたちに対する神の愛が明らかにされたのである。¹⁰わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して下さって、わた

私たちの罪のためにあがないの供え物として、御子をおつかわしになった。ここに愛がある。¹¹愛する者たちよ。神がこのようにわたしたちを愛して下さったのであるから、わたしたちも互に愛し合うべきである。¹²神を見た者は、まだひとりもない。もしわたしたちが互に愛し合うなら、神はわたしたちのうちにいまし、神の愛がわたしたちのうちに全うされるのである。¹³神が御霊をわたしたちに賜わったことによって、わたしたちが神におり、神がわたしたちにいますことを知る。」（ヨハネ一4：7～13）

最後に「御霊」（聖霊）について触れておこう。イエスは、いわゆる「山上の垂訓」の中で次のように語っておられる。

「⁷求めよ、そうすれば、与えられるであろう。捜せ、そうすれば、見いだすであろう。門をたたけ、そうすれば、あけてもらえるであろう。⁸すべて求める者は得、捜す者は見だし、門をたたく者はあけてもらえるからである。（中略）¹¹このように、あなたがたは悪い者であっても、自分の子供には、良い贈り物を知っているとすれば、天にいますあなたがたの父はおさら、求めてくる者に良いもの（聖霊）を下さらないことがあるのか。」（マタイ7：7～11）

しかし、この「良き賜物」である聖霊をイエスは生前には弟子たちに与えることができなかった。十字架による「罪のあがない」（贖罪）の御業によって、「罪なき者」とされて初めて、人はこの「聖なる霊」（聖霊、御霊）を受けることができるようになったのである。

「聖霊」の授与の土台は「十字架」のあがない（贖罪の完了）であった。まさに「十字架・聖霊」は一如であつて、切り離すことができない事態であることを忘れてはならない。

そして、クリスチャンの人生は、この「導き主」「助け主」である「聖霊」に導かれて、神の御意になう生き方を貫くことにある。「神・キリスト」の御旨（御意）を第一として生きる生き方である。



報告

2017年4月

復活節集会並びに講演会の報告

2017年4月19日(京都)

2017年の復活節は好天に恵まれ、会場(京都・くに荘 3階)からの眺めは、階下に鴨川の清流を、東は如意ヶ嶽(通称は大文字山)とそれに続く東山連峰を一望し、桜と新緑の美しい大自然も主のご復活を讃えているような観がありました。

各地から集った30数名の兄弟姉妹と共に主のご復活の喜びと感謝の祈りを捧げました。

午前の集会の司会は錦織成史兄、讃美歌は、496番「うるわしの白百合」、聖書朗読は、ルカ伝福音書24章1〜32節、司会者の祈祷・証言の後の讃美歌は、148番「すくいぬしは」。

続く講筵の題は、「汝ら世にありては艱難^{なやみ}あり、されど雄々しかれ。我すでに世に勝てり」(ヨハネ伝16章33節)。主イエスは我等の罪(神に対する反逆)を背負って十字架上で贖罪の大業を果たされた後、輝く栄光の御姿に変貌して顕現して下さった。この栄化の瞬間を見た者は誰もいない。マグダラのマリヤや女性たち、そして11弟子たちもイエスを葬った墓の中をのぞいてみたが、布は見つかつても、御体は無く、ただ、うろたえたり、悲しんだりというありさまで、「苦しみを受けた後、必ず甦る」と言っておられたことに気付く者はいなかった。不思議な方法で、イエスの方からご自身を顕された。エマオの途上の旅人のすがたでご自身を顕されたイエス(ルカ伝)、また、墓から立ち去りがたく泣いていたマグダラのマリヤに顕現されたイエス(「マリヤよ」「ラボニ(師よ)」の感動的な場面)。そして、夜、戸を閉じて隠れていた弟子たちに現れて、

「平安なんじらに在れ、父の我を遣し給えるごとく、我も亦なんじらを遣す」

と語り、息を吹きかけて、

「聖霊をうけよ」

と宣せられたイエス。この宣言(約束)は、やがて聖霊降臨節において成就し、使徒行伝における目覚ましい働きとなつて展開する。

「我は、今日も明日もその次の日も進み行くなり」

の壮なる主のお姿である。私たちは、このキリストをいただいている。聖霊(御霊)となつて世の終わりまで、私たちの中に、そして、傍に御臨在下さる主キリストに在って、どんな状況、境遇にあつても、私たちは主の証人^{あかしびと}として、全存在、全生涯をかけて主のために働かざるを得ない。

午後の講演会には、外部から出席されたのは15〜20名ほどであった。「無くてならぬもの」との演題で、予め配布した原稿(A4 10枚)を基にしながら、かなりの補足をしたりして1時



間50分ほど語った。講演後すぐに感謝の祈りをささげた。この祈りの時、「なぜか涙がこみ上げて止まらなかった」と後ほど、ご年配の未信者の女性の方からメールをいただいた。講演会がきっかけとなって、聖書に取り組み、本当の信仰に導かれてほしいと切に祈る。召団員一人ひとりが伝道の使命を担っている。「自分なんか、とてもそんなことは出来ない」などと考えずに、日々、主キリストと共なる生活を送る中で、その使命を果たすことができるようにと祈り求めている。「無くてならぬもの」は聖霊（御霊）なのだから。



課題

2017年5月 福音特別セミナーの課題

2017年5月13～14日（御殿場東山荘）

5月13日（土）～14日（日）の特別セミナーの主題とその他のための課題を次のように設定いたします。セミナーに参加される方は、各自、それぞれにご自分の立場（置かれた状況）に応じて回答をご用意いただきたく、よろしくお願い致します。

主題 日常生活の中での「福音の実践のために」

課題 以下に掲げる諸項目についての「あなたの回答」をご用意ください。

【問1】

- ・あなたにとって、福音（キリストによる救い）とはどのようなものですか？
- ・福音を受けとったこと（キリストを信ずるようになったこと）によって、あなた自身はどのように変わりましたか？
- ・また、あなたの日々の生活はどのように変わりましたか？

【問2】

- ・近所付き合い、職業生活（職業に対する考え方と実践面）、経済生活（経済問題）、家族関係（家庭生活）などにおいて、考え方や実生活において変化した点がありますか？

【問3】

- ・あなたは、集会をどのように考えていますか？
- ・「あれば結構だけれど、無くても別に困ることはない。信仰とは、所詮、個々人の問題なのだから」という考え方もあると思われませんが、あなたはどうか？
- ・聖書は、この点につきどのように教えているでしょうか？

【問4】

- ・あなたが集会（教会）に所属なさっているなら、その集会に対して、どのような働き（貢献）をしようとなさっていますか？
- ・遠隔地のため、あるいは、家庭の事情や職場の事情により、集会に出席すること



自体が難しい状況にある方は、どのように対処なさっていますか？

【問5】

- ・あなたが所属なさっている集会（教会）では、聖日（日曜日）の集会（礼拝）をどのようなものとして位置付けておられますか？
- ・集会（礼拝）において、何が最も大切なこととされていますか？
- ・また、あなた自身は、聖日集会において何が最も大切だと考えておられますか？
- ・その考えに対して集会は応えていますか？

【問6】

- ・あなたの所属なさっている集会（教会）は、「伝道」ということをどのように位置づけ、どのように実行（実践）しようとなさっていますか？
- ・あなた自身は、どうお考えでしょうか？

【問7】

- ・主キリストの御意^{みこころ}にかなうためには、日々の生活において何を最も大切なこととお考えでしょうか？

【問8】

- ・あなたは、日々の生活の中で、聖書（旧約・新約）をどのようにお読みになつていますか？



ご案内

2017年7月 京都キリスト召団 夏季福音特別集会のご案内

2017年7月9日(京都)

Ⅰ 特別集会を開催する主体と趣旨

今年の夏季福音特別集会開催の「趣旨」について、始めに一言しておきたいと思います。キリスト召団全体の「夏季福音特別集会」は毎年、「全日本キリスト召団」の団長であった小池辰雄先生が主導して開催されて来しました。

しかし、先生が天に召された後は、各キリスト召団は、それぞれが、独立独歩、それぞれに賜わった使命を自覚して、それぞれの道を歩んでまいりました。最早、「全日本キリスト召団」といった、各キリスト召団を統合する組織体は名実ともに存在せず、各キリスト召団が、個別に、独立の団体として存在するにすぎない、と考えています。ただし、共通点は、各召団のリーダーの立場に在る者は、いずれも、小池先生に学び、その薫陶を受け、小池福音の神髄を継承し、後代に伝えて行くべき使命を自覚している事でした。その中で、奥田は最年長者であり、最も早くから小池福音に接した一人として、「主キリストに直結し、十字架・聖霊を一体一如の根源現実として体受得すること」を標榜して、夏季特別福音集会における講師の役目を担ってまいりました。しかしながら、このような奥田の役割は、昨年の「夏季福音特別集会」をもって終了した、と奥田は心得ております。だから、昨年の「夏季福音特別集会」の終了時の挨拶において、翌年(つまり本年、2017年)の夏の特別集会のことは、予告しておりません。

このような自覚のもとで、各キリスト召団が助け合い、時には合同の集会やセミナーを開催して協力することは、喜ばしいことと考えています。しかし、それは、他召団に「依存する」からではなく、どこまでも、「自らの独自性を自覚し、貫く」という視点を維持した上でのことでなければならぬ、と考えています。現在、各召団における共通の問題点は、メンバーの高齢化と新しい、特に若い、次の世代を担う会員が乏しいという点です。

このような現状のもとでは、各召団のメンバーは、単に会員として召団に属するだけではなく、召団の責任ある担い手として、リーダーと一緒に、「召団のこれから」に思いを致し、各自が、このような問題をどう打開していくべきかについて、考え、祈って行くことが不可欠だと考えます。今年5月14日、15日の「御殿場東山荘での特別セミナー」では、奥田は、この問題を正面に据えて、各自が各召団のメンバーとして、所属召団の課題をどう受け止め、どう克服していくのがよいかについての自覚を深めて頂くことが、講師として招かれた奥田の願いでありました。



いわゆる「キリスト教国」ではない日本において、「異邦人」である私たちは、社会においても、キリスト教の世界においても、少数派、辛子種一粒のような「微小」な存在です。だからこそ余計に、上に述べたような問題、課題を常に自覚して、「狭き門・細き路」を歩むという宿命を背負っています。

このような厳しい現実に対して、パウロはわたしたちに対してエールを送ってくれています。使徒行伝の20章17節から38節、ミレトにおいてエペソの教会の長老たちを呼び寄せて、彼らに語りかけた「別れの言葉」と「別れの場面」です。ぜひ、熟読して下さい。その中で、パウロは、「今わたしは、主とその恵みの言ことばとに、あなたがたをゆだねる。御言みことばには、あなたがたの徳をたて、聖別されたすべての人々と共に、御国をつがせる力がある。」と力強く語っています。また、ローマ書15章において、自らの使命につき、

「異邦人のためにキリスト・イエスに仕える者となり、神の福音のために祭司の役を勤め、こうして異邦人を、聖霊によってきよめられた、御旨にかなうささげ物とするためである。」

「わたしは、異邦人を従順にするために、キリストがわたしを用いて、言葉とわざ、しるしと不思議との力、聖霊の力によって、働かせて下さったことの外には、あえて何も語ろうとは思わない。」

と語っています。

以上、長々と書いてきたことを要約すれば、奥田は、各召団を統括するような立場にはなく、京都キリスト召団のリーダー(牧者)にすぎないこと、各召団はそれぞれに独自のリーダーのもとに(もし、リーダーが不在なら全員でカバーして)独立独歩、独自の歩みを続けていただきたいこと、そして、「京都くに荘」での今年の「夏季福音特別集会」は、京都キリスト召団の「特別集会」であること、であります。もちろん、他の召団の会員の方々の参加(友情参加)を拒否するものではありません。むしろ、各召団の交流の良い機会として、歓迎いたします。繰り返しになりますが、集会の主題も、京都キリスト召団の「特別集会」として、召団のメンバーの一人ひとりに、深く受けとっていただきたいと願っているところに焦点を絞った内容になることを、ご了解いただきたく願っています。

II 特別集会の「主題」(対象)と「宿題」

主題は「ヨハネ伝福音書を身読する」

その趣旨は以下の通りです。

ヨハネ伝福音書(以下、「ヨハネ伝」と略す)は、マタイ、マルコ、ルカの三つの福音書(共観福音書)とは異なる独自性の強い、「霊的福音書」と言われています。共観福音書ではキリストの言・行が中心で、各福音書の独自の視点からそれを叙述していますが、ヨハネ伝は、キリストの御業や出来事自体の叙述に力点があるのではなく、その出来事や御業の奥に秘



められた深い霊的奥義を示すことに力点が置かれているようです。従って、読む者も、その視点から、それぞれの場面における「霊的奥義」を汲み取るように努めるべきだと言えます。今一つ、私が強調したいのは、現在の私たちが受けとるべき事態(霊的現実)は何か、という視点です。キリストが人々や弟子たちに語っておられる事柄は、多くの場合、「将来起こること」が、将来において実現する神・キリストからの約束」です。

「現在」の視点で見れば、その多くは、「既に実現したか、実現しつつある事態」です。であるならば、わたしたちは、そのような角度から受けとらなければなりません。

例えば、ヨハネ伝の7章37節以下の

「祭の終りの大事な日に、イエスは立って、叫んで言われた、『誰でも渇く者は、わたしの所に来て飲むがよい。わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その腹から生ける水が川となって流れ出るであろう』。これは、イエスを信じる人々が受けようとしている御霊をさして言われたのである。即ち、イエスはまだ栄光を受けておられなかったので、御霊がまだ下っていないなかったのである。」

との叙述に接した時は、

「イエスは既に栄光をお受けになったのだから、今、直ちに、御霊を下してくださいるはずである。」

と読んでいたきたいのです。

そこで、「宿題」として、各人で、ヨハネ伝の

- (1) 1章19節～12章の終りまで、
 - (2) 13章～17章の終りまで、
 - (3) 1章1節～18節まで、
- について、

①各章においての主題は何か、

②そのポイント(要点)は何か、

③貴方(貴女)は、そこから、自分との関わりにおいて、何を汲み取るか、

をメモに残しておいてください。そうすることによって、単に、講師(奥田)の話を「受け身」で聴くのではなく、「セミナー」に参加するような気持ちで、主体的に取り組むことができると思います。この経験を通して、各自が日常、ひとりで聖書を読む時の「読み方」が質的に深められることを期待いたします。

なお、時間的にゆとりがあれば、ヨハネ伝で記されている出来事や、キリストの言葉、御業が、他の福音書(共観福音書)では、何処に記述されているか、にも留意していただけると幸いです。

